

「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位と パーソナリティ特性の比較

筑波大学心理学系 杉原 一昭

筑波大学大学院（修）教育研究科 宮田 敬

筑波大学大学院（博）心理学研究科 桜井 茂男

A comparison between perpetrators and victims of *ijime* on sociometric status and personality traits.

Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*), Takashi Miyata (*Graduate School of Education, University of Tsukuba, Ibaraki 305*), and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305*)

The purpose of this study was to compare bullies with bullied children on sociometric status and personality traits. "Bullies," "bullied children," and "other children" (control group) were selected by method of peer nomination in several classes. Analysis indicated that both bullies and bullied children were rated lower on sociometric status than the control children. In particular, bullied children had the lowest sociometric rating indicating that they were rather isolated in their respective classes. Analysis of personality traits indicated that bullies were extroverted, impatient, and dishonest, while bullied children were introverted, nervous, and dependent on others.

Key words: bully, sociometry, personality traits, aggressive behavior, frustration, stress.

問 題

(1) 「いじめ」の特徴とその背景

子ども社会における、いじめる、いじめられるという問題は、最近になって始まったものではない。従来、「いじめ」は確かに存在していた。しかし、今日ほど問題にならなかつただけである。今日のように「いじめ」の問題が、テレビで特集番組として取り上げられたり、出版物として次々と発刊されたりするほど騒がれるようになったのは何故か。最も大きな原因は、今日の「いじめ」が昔のそれとはその性格、方法において大いに異なっていることであろう。

宮原(1983)は現代の「いじめ」が古典的な「弱い者いじめ」とは異なる特徴として、以下の10点をあげている。

① 弱いからいじめるのではなく、自分たちのグループや集団の均質性からはずれたものをいじめる。

② 1対1でよりも、個人ないしは小グループを

大ぜいでいじめる。

③ みんなでやれば怖くないという匿名性をもつ。

④ いじめの相手が、いじめの側に同化したとき、いじめる側に転化する。

⑤ 公的権力や組織に対して向かわず、私的グループや弱いグループや弱い個人に向かう。

⑥ 強力な反発があればおさまらず、なければより強く、継続的になる。

⑦ 非人間的残酷さをしだいに強め、遊戯性、快楽性をもっている。

⑧ ルールなく、どんな手段でもとる。

⑨ 理由なく、突然いじめ、誰を対象とするかわからない。

⑩ 仲間であり、身内であったものをもいじめる。

さらに、宮原(1983)は現代の「いじめ」の本質について、「自己のまわりにある均質な集団の雰囲気と同化しないもの、同化できないものへの差別・憎悪・無関心の表現であり、均質集団から自分一人

が脱落することへの恐怖感の表現でもある。つまり、自立した個人として生きることのできない弱さ、個性的個人として、集団にたちむかえない弱さを基礎としている」と述べた後、「彼らが弱い者を攻撃するのは一見攻撃的に見えながら、現実に対する絶望と逃避の表現、自虐的行為にすぎないのである」と結んでいる。

また、文部省が全国の小学校に配布した生徒指導資料の中では、「いじめ」の背景として、①児童の対人関係の未熟さ、②欲求不満の増大、③ストレスを解消する手段の乏しさ、の3点があげられている。これらについて少し詳しくみることにする。

対人関係の未熟さについては、大きな要因として他人との接触時間の減少をあげることができよう。特に、児童の対人関係に大きな影響をもたらす「遊び」で、「遊び時間」の減少が目立っている。昭和42年の京都府教育委員会の「学童生活調査」によれば（深谷ら、1970）、昭和22年と昭和42年との「遊び時間」の平均を比較したところ、昭和22年では1時間45分であったが、42年では43分と、1時間以上も減少している。また、総理府の「国際児童年記念調査」（1979）によると（詫摩、1984）、日本の10歳から15歳の子どものうち「遊ばない」と答えたものが16.1%、遊び時間が「30分以下」と答えた者が13.5%にのぼっている。ちなみに、同時に行われたアメリカの子どものを対象した調査によると、「遊ばない」は0.8%、遊び時間が「30分以下」は2.4%であった。

日本の児童における「遊び時間」の減少は本来、「遊び」の中で培われる子どもの自主性・社会性が欠如する結果を招いたのではなかろうか。また、「遊び」に限らず、核家族化や少子化の傾向も、子どものまわりに存在する人間の数を少なくさせたという意味で、対人関係の未熟さを助長する原因となったと考えられよう。

第2の欲求不満の増大についていえば、今日の児童は、塾などによる分刻みの生活、情報化社会における情報量の増大、保護者の過剰な期待などによって、日々の生活にかなりのストレスが生じているものと考えられる。深谷（1978）の中学生を対象とした調査では、「1日が25時間になったら、残りの1時間を何に使いたいですか」という質問に対して、「ゆっくり寝てみたい」と回答した生徒が全体の70%以上であった、と報告されている。このような結果は、現在の生活から逃避したいと思っている子どもが意外に多く、また、逃避もできずに自分の意に反した生活を仕方なく送っている子どもの欲求不満が、日に日にうっ積されているのではないかとい

うことを推察させる。

このように欲求不満が増大しているにもかかわらず、ストレスを解消する手段は少ないと思われる。前述したように、友だちと遊ぶ機会が減っている現状からもこのことは推察できよう。ストレスが蓄積され慢性化し、そのはげ口が「いじめ」という形で現われてくるものと考えられる。桜井・宮田（1985）の調査では、いじめの主な動機として「面白い楽しいから」が全体の7%を占めている。この調査結果は、先の宮原（1983）が述べた「いじめ」の特徴の「遊戯性」「快楽性」に通じるものと言えよう。

以上のように、対人関係の未熟さ、欲求不満の増大、ストレスを解消する手段の乏しさという、3つの要因が様々に絡み合わさって、今日の「いじめ」が現われてきていると考えられる。

(2) 「いじめっ子」の特徴

「いじめっ子」にもいろいろなタイプがあるので一概には言えないが、文部省の生徒指導資料では、「性格の面で、よくしゃべり、よく活動するなど、一般的に活発な性格の児童に多く見られ、どちらかといえば落ち着きがなく、いたずら好きである。また、生活態度にけじめがなく、忘れ物が目立ち、行動が雑で、無神経な面がある」と「いじめっ子」の特徴をまとめている。また、詫摩（1984）は「いじめっ子」のタイプとして、わがままな子、家庭内で満たされていない子、寛容度のない子、を掲げている。

前述の「いじめ」の特徴（宮原、1983）の中で、「多対1でいじめる」「匿名性をもつ」という点が指摘されていた。この点からすると、「いじめっ子」は数多く存在するものと考えられる。このような「いじめっ子」たちは、いじめないと他の「いじめっ子」にいじめられるという立場に立たされている子どもたちではないだろうか。このような意味で、彼らは「いじめっ子」にも「いじめられっ子」にも完全に属することのない、ごく普通の子どものなかであろう。しかし、「いじめ」の場面に遭遇した場合に、本心では止めたいと思っているが、そうすることによって自分がいじめられるという危機感を巧みに察知し、その結果、傍観したり、または自分のフラストレーションを晴らすために、一緒になっていじめたりするものと考えられる。加藤（1981）の報告では、いじめ場面に遭遇した時の行動について、「黙ってみている」が17.5%、「一緒にいじめる」が12.5%というように、全体の3割の子どもがこのような傾向にあることが示されている。

最後に、「いじめっ子」、特に「いじめっ子」の中

のリーダーの特徴が最近変容してきているという点について述べることにする。従来、「いじめっ子」のリーダー、いわゆるガキ大将は、腕力に物を言わせる粗暴な子になるケースが多かったが、今日では、彼らを裏で操る知能犯がリーダーとなっているようである。「いじめられっ子」(富田武忠編)の中で、ある現場教師は最近の「いじめっ子」のリーダーの特徴として、①頭がよく、成績も上位だが人望は薄い、②実行力はあるが、ずる賢い、③世馴れしていて、担任教師の前では丁寧な言葉を使う、④如才なく、近隣の大人たちのウケもよい、という4点をあげている。つまり、従来のリーダータイプの子どもをうまく利用して弱い者をいじめるが、直接的に手を下すことがないので、教師などにはわかりにくく、「いじめられっ子」が両親や教師に報告しない限り、リーダーが表沙汰になることは少ないのである。このような知能犯的要素が「いじめ」をより一層陰湿化させていると考えられる。

(3) 「いじめられっ子」の特徴

「いじめられっ子」も「いじめっ子」と同様、類型化することはなかなか困難であるが、宗内(1981)は次のように分類している。

①体力・腕力・運動能力に劣る者：物理的な力が劣る者は、いじめっ子にとって物理的な反撃を受ける心配が少ないので、とかくいじめの対象になりやすい。肢体不自由児や虚弱児はその典型である。

②知的発達のおくれている者：知的におくれている者は、からかわれているという認知さえおくれることもあって、からかいの対象になりやすい。しかし、腕力にすぐれていると、逆にいじめっ子になる場合も少なくない。

③情意的な欠陥のある者：内気で、臆病で、追従的な子どもは、特に粗暴な子どもにつけこまれ、いじめられやすい。自己主張や強い態度をとることができない。

④社会的に孤立している者：友だちもなく集団から孤立している子どもは、だれも手助けすることはないという安心感から、いじめられやすい。特に、いじめっ子が複数のときによくねらわれる。

⑤そのほか特別に目立つ者：際立った優等生とか、先生に特別に可愛がられているとか、母子家庭や生活保護家庭の子どもとか、何か特別に目立つ点があると、これもいじめの対象となりやすい。

以上のように、様々な様相があげられ、これらが重なるとき、「いじめられっ子」になる確率は高くなるらしい。

また、文部省の生徒指導資料の中で「いじめられ

っ子」の性格については、「わがままで、依存性の強いことが多い。また、小心で過敏であり、びくびくしやすい反面で、自己顕示欲が強く、反抗したりしやすい」と指摘している。

上述した内容から「いじめられっ子」は、ある面において集団から逸脱しているだけの普通の子どもと何ら変わらない者と解釈できる。したがって、仲間関係が円滑にもたれ、逸脱する子どもを他の子どもたちが援助するという、愛他的要素が子どもに備わっていれば、「いじめられっ子」は存在しないのかもしれない。しかし、今日では「いじめられっ子」を擁護すること、たとえば、仲間はずれにされている子と遊んだり、いじめた子に注意することなど、が原因で逆に自分がいじめられるというケースが少なくない。今日の子ども社会では「善」が「善」として存在しえなくなってきたように思われる。

陰湿かつ執拗な「いじめ」を受ける彼らは、相談する友だちもいないし、両親にも告白できず、完全に孤立化してしまう。それゆえ、ストレスのう積は普通の子どもたちより大きくなり、そのはけ口として自分より弱い者に対して攻撃を加えたりもする。また、その攻撃は残忍で、1984年に大阪でおこった、いじめられっ子が仕返しにいじめっ子を殺した事件に代表されるように、今日の「いじめ」の残忍性を越えるものさえある。このような二次的犯罪を防止するためにも、「いじめ」に対する方策を一刻も早く講じる必要がある。

目 的

本研究では、「いじめっ子」と「いじめられっ子」の仲間集団内での実態を明らかにすることを目的とし、次の2点について調査を行う。

①「いじめっ子」と「いじめられっ子」の仲間集団内での社会的地位の比較

②「いじめっ子」と「いじめられっ子」のパーソナリティ特性の比較

①については、「いじめっ子」は「問題」のところで述べたように、「いじめ」自体が集団化、組織化している点から、集団の成員からの評価は普通の児童のそれと差がないものと考えられる。すなわち、「いじめ」に同調する子どもが数多く存在し、彼らが集団を構成する状況下では、「いじめっ子」は、ある意味でのガキ大将的要素を備え、集団を動かす核とも成りうるものと考えられる。

「いじめられっ子」については、「いじめっ子」と逆のことが考えられる。前述したように「いじめられっ子」はいかなる要因であれ、集団から孤立する児童であろう。すなわち、「いじめっ子」にいじ

められることで、集団の「いじめっ子」以外の成員からも排斥されてしまう場合が多いことから、「いじめられっ子」が集団内で仲間を構成するのは困難であると考えられる。したがって、「いじめられっ子」の仲間集団内での社会的地位は低いと予測される。

②については、「いじめっ子」と「いじめられっ子」のパーソナリティは「問題」のところで述べたが、それらの知見は現場の教師などの報告によるものが多く、統計的処理に基づくものは数少ない。その中で桜井・宮田(1985)は「いじめっ子」と「いじめられっ子」のイメージについて調査し、「いじめっ子」は「うるさく、強がり」、「いじめられっ子」は「おとなしく、弱虫」なイメージをそれぞれもつと報告している。しかし、この報告はイメージを評定したもので、現に存在する「いじめっ子」や「いじめられっ子」についての評定ではない。そこで、集団内に実在する「いじめっ子」と「いじめられっ子」についてのパーソナリティ特性を評定してもらい、その特徴を検討する。

方 法

(1) 被調査者

神奈川県横須賀市内の公立 H 小学校の児童、5年生3クラス132名(男子73名,女子59名),6年生3クラス113名(男子54名,女子59名)の計245名(男子127名,女子118名)であった。

(2) 調査期日・場所

調査は1984年9月に各教室で、著者の2名と筑波大学の学類生1名の計3名が実施した。

(3) 質問項目

①学級内の社会的地位の測定:各児童の学級内での社会的地位を測定するために、ソシオメトリック・テスト(sociometric test)が実施された。選択・排斥を評定する場面は、当該クラスにおける仲間集団の生活全般についての社会的地位を測定するために、「遊び場面」とされた。また、選択・排斥数はそれぞれ3名に制限されたが、同性・異性の制限は加えられなかった。

②「いじめっ子」「いじめられっ子」のパーソナリティ特性の評定:学級内において性別に関係なく「いじめっ子」と思われる児童1名を選び、その児童についてのパーソナリティ特性について評定させるように作成された。

パーソナリティ特性の評定については、鈴木(1974)の児童用 Self-Differential Scale (以下 SDS と略記)の中から、「いじめっ子」と「いじめられっ子」の特性に関連すると判断された*15個の性格特

性の対と、「いじめっ子」と「いじめられっ子」の特性について、SDSの中で類似したものを修正した2個の性格特性の対(しっかりしている—甘えている, 気が強い—気が弱い)の計17個で構成された(Fig.7参照)。評定はSD法で5件法が用いられた。そして、集計の際は、左側の性格特性から右側へ、1点,2点,3点,4点,5点と得点化された。「いじめられっ子」の場合にも、「いじめっ子」と同じ形式であった。

(4) 手続き

調査はクラス単位の集団で実施された。調査者は、簡単な自己紹介をしたあと、調査内容の秘密の保持を約束して、回答方法を説明し、自由に回答させた。各クラスとも40分位で全調査が終了した。

結果と考察

(1)「いじめっ子」と「いじめられっ子」の仲間集団内での社会的地位の比較

「いじめっ子群」と「いじめられっ子群」は次のように定義された。「いじめっ子群」(以下I群と略記)とは、クラスを構成する成員(クラスの数)の10%以上から「いじめっ子」として選ばれた児童の群である。「いじめられっ子群」(以下J群と略記)も同様に、クラスの10%以上の成員から「いじめられっ子」として選ばれた児童の群である。また、統制群として「ふつうの子群」(以下N群と略記)を設け、成員の誰からも「いじめっ子」としても「いじめられっ子」としても選ばれなかった児童の群と定義された。

上記の定義に従い分類した結果、I群は15名(男子15名,女子0名),J群は11名(男子8名,女子3名),N群は152名(男子57名,女子95名)であった。

ソシオメトリック・テストへの反応は、クラス毎にソシオメトリックスにまとめられた。個々の被調査者に対する選択数,排斥数に基づき、それぞれの被選択数(以下Cと略記),被排斥数(以下Rと略記),被選択数から被排斥数を差し引いた値(以下CRSと略記),相互選択数(以下MCと略記),相互排斥数(以下MRと略記),社会測定的地位指数(以下I_{SSS}と略記)*が算出された。

I群,J群,N群における,6つの指標,すなわち,C,R,CRS,MC,MR,I_{SSS},の平均値(M)と標準偏差(SD)が,Table 1とFig.1~6に示されている。Cochran-Coxの方法により6つの指標について,分散の同質性の検定を行ったところ,すべてに有意

*:この評定は著者3名で行った。

*: $I_{SSS} = \frac{1}{2} \left(\frac{CRS}{N-1} + \frac{MC-MR}{3} \right)$ N:クラスの構成人数

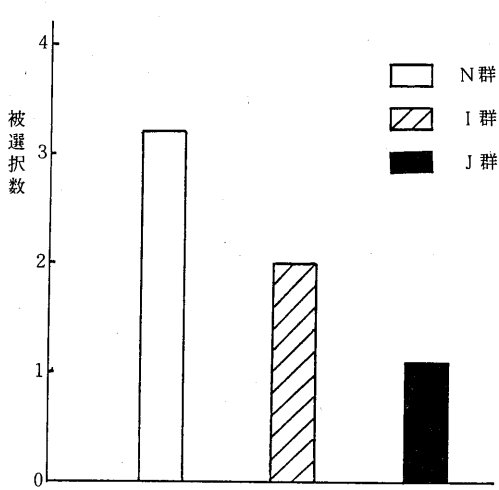


Fig. 1 3群の被選択数 (C) の平均値

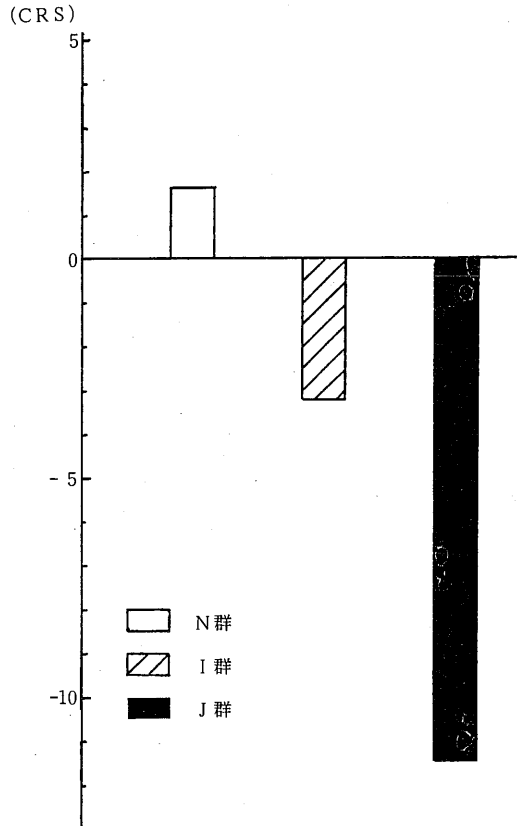


Fig. 3 3群のC-R (CRS) の平均値

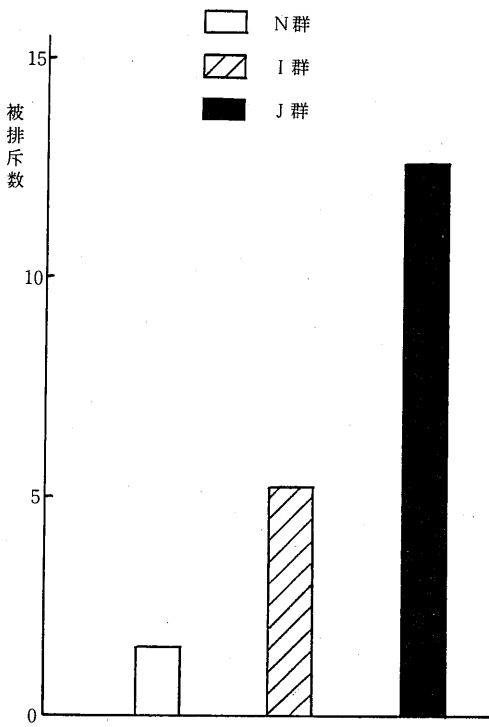


Fig. 2 3群の被排斥数 (R) の平均値

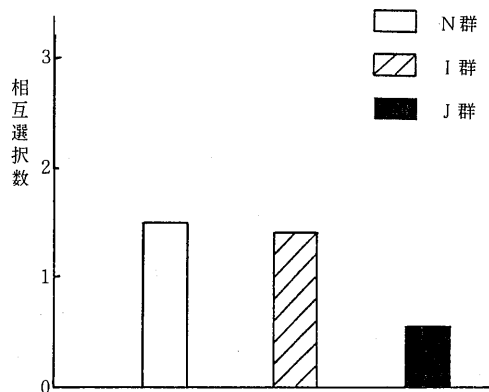


Fig. 4 3群の相互選択数 (MC) の平均値

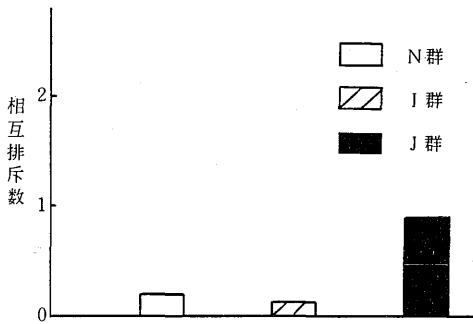


Fig. 5 3群の相互排斥数 (MR) の平均値

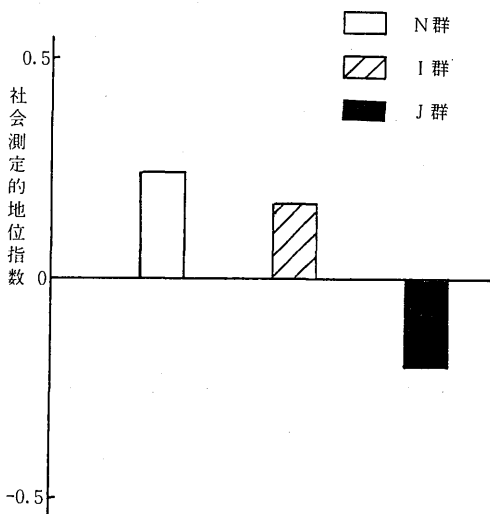


Fig. 6 3群の社会測定的地位指数 (Isss) の平均値

Table 1 6指標についての平均値 (M) と標準偏差 (SD)

項目		N群	I群	J群
C	M	3.20	2.00	1.09
	SD	2.04	1.60	1.04
R	M	1.58	5.20	12.55
	SD	2.53	2.93	8.65
CRS	M	1.61	-3.20	-11.45
	SD	3.76	3.30	9.30
MC	M	1.50	1.40	0.55
	SD	1.02	1.18	0.69
MR	M	0.20	0.13	0.91
	SD	0.50	0.35	1.22
Isss	M	0.24	0.17	-0.20
	SD	0.24	0.24	0.33

差 ($p < .01$) がみられたため、ノンパラメトリック法の H テストで検定が行われた。その結果、C ($x^2 = 15.921, df = 2, p < .01$), R ($x^2 = 44.166, df = 2, p < .01$), CRS ($x^2 = 42.709, df = 2, p < .01$), MC ($x^2 = 8.893, df = 2, p < .05$), MR ($x^2 = 8.174, df = 2, p < .05$), Isss ($x^2 = 17.423, df = 2, p < .01$) のすべての指標において3群が同値であることが棄却された。

そこで、各指標について U テストを用いて2群間の差の検定を行った。その結果、Cについては、N群とI群およびJ群の間に有意差が認められた ($CR = 2.110, p < .05$; $CR = 3.530, p < .01$)。Rについては、N群とI群およびJ群の間 ($CR = 4.874, p < .01$; $CR = 4.931, p < .01$)、および、I群とJ群の間に有意差が認められた ($CR = 2.110, p < .05$)。CRSについては、N群とI群およびJ群の間 ($CR = 4.605, p < .01$; $CR = 4.944, p < .01$)、および、I群とJ群の間に有意差が認められた ($CR = 2.318, p < .05$)。MCについては、N群とJ群の間に有意差が認められた ($CR = 2.999, p < .01$)。MRについては、N群とJ群の間 ($CR = 2.798, p < .01$)、および、I群とJ群の間に有意差が認められた ($CR = 1.966, p < .05$)。Isssについては、N群とJ群の間 ($CR = 4.062, p < .01$)、および、I群とJ群の間に有意差が認められた ($CR = 2.778, p < .01$)。

「いじめっ子群」は「ふつうの子群」に比べて、被選択数は有意に少なく、被排斥数は有意に多いという結果から、「いじめっ子」は普通の子と社会的地位において差がない、という仮説を支持するには至らなかった。これは、質問紙に対する回答が秘密にされたことにより、「いじめっ子」に対する本音が現われたためと考えられる。換言すれば、集団生活場面では「いじめっ子」に対して敵意を示すといじめられるから、体裁を繕い同調しているふりをするけれども、本調査においては、自分の質問紙の回答内容は秘密にされ、「いじめっ子」にはわからない。

Table 2 6指標についての U テストによる2群の差の検定 (CR)

項目	N群×I群	N群×J群	I群×J群
C	2.110*	3.530**	1.494
R	4.874**	4.931**	2.110*
CRS	4.605**	4.944**	2.318*
MC	0.403	2.999**	1.890
MR	0.248	2.798**	1.966*
Isss	1.111	4.062**	2.778**

(注) * $p < .05$, ** $p < .01$

* これらの結果は Table 2 にまとめられている。

いことから、本心がでたのであろう。このことから「いじめっ子」は仲間集団内においては好まれていない存在であると考えられる。この解釈の妥当性については、もう一度、質問紙に対する回答を公開することを前提として同じ調査を行い、今回の結果と比較すれば明らかとなろう。

相互選択数において、「いじめっ子群」と「ふつうの子群」の間に有意な差がみられなかった。このことは、部分的にはあるが、「いじめっ子」は普通の子と社会的地位において差がないという仮説を支持している。しかし、この結果の解釈としては、「いじめっ子」が普通の子と仲間集団を構成している、あるいは、「いじめっ子」同士で仲間集団を構成しているという、2通りの考え方が可能である。前者の場合であれば、「いじめっ子」は学級内で仲間関係を円滑に行い、社会的地位も高いものと考えられる。後者の場合であれば、「いじめっ子」だけで構成された仲間集団は学級内において孤立したものであり、学級内での「いじめっ子」の社会的地位はさほど高いものではないと考えられる。前述の、「いじめっ子群」は「ふつうの子群」に比べて、被選択数が少なく被排斥数が多いという結果からは、後者の解釈が有力であると推察される。

「いじめっ子群」と「いじめられっ子群」の間には、被排斥数 (R)、被選択数から被排斥数を差し引いた値 (CRS)、相互排斥数 (MR)、社会測定的地位指数 (Isss) において有意な差がみられたことから、「いじめっ子」は「いじめられっ子」より学級内の社会的地位は高いものと考えられる。このことは先に述べたように、「いじめっ子」がいかなる形であれ、仲間集団に属していることから理解できよう。

「いじめられっ子群」は「ふつうの子群」との間に、すべての指標において有意な差がみられたことから、「いじめられっ子」は社会的地位が低いという仮説は検証されたといえよう。特に被排斥数が多く、単純計算でも学級の30%以上の成員から排斥されていることは、学級内の仲間集団から孤立していると考えられる。それだけ、今日の子どもたちは閉鎖的集団を形成する傾向が強く、「いじめられっ子」の締め出しは強固なものなのであろう。そして、「いじめられっ子」の孤立感は大きくなり、このことが引き金となって、非行などの社会病理をひきおこすものとも考えられる。

(2) 「いじめっ子」と「いじめられっ子」のパーソナリティ特性の比較

(1) の定義では「いじめっ子群」および「いじ

められっ子群」の人数が少なく、全体的な傾向をみるにはもう少し数を増やした方がよいと判断されたため、「いじめっ子群」および「いじめられっ子群」を、学級の成員1名以上から「いじめっ子」および「いじめられっ子」として選ばれた児童の群と再定義された。その結果、「いじめっ子群」は55名(男子44名, 女子11名)、「いじめられっ子群」は46名(男子31名, 女子15名)であった。

「いじめっ子群」および「いじめられっ子群」の17個の性格特性の平均値 (M) と標準偏差 (SD) が Table 3, 4, および Fig. 7 に示されている。それぞれの性格特性について t 検定を行った結果は、Table 5 に示されている。これによると、11の性格特性に有意差が認められた。

Table 3 で示されたように、「いじめっ子」の特性で得点が高い項目 (4 点以上あるいは4 点に近いもの) と低い項目 (2 点以下あるいは2 点に近いもの) についてあげてみると、「明るい」「ふまじめ」「うるさい」「わがまま」「いじわるな」「つよがりな」「めだつ」「活発な」「短気な」「気が強い」となり、目的のところでも述べた桜井・宮田 (1985) とほぼ同じ傾向がみられた。この10個の性格特性をふまえて、「いじめっ子」のパーソナリティ特性をまとめると次のようになろう。「いじめっ子」は明るく活発で、外向的であり、学級内では目立つ存在である。そして、強靱な面をもっている反面、耐性・誠実さに欠

Table 3 「いじめっ子群」の性格特性についての平均値 (M) と標準偏差 (SD)

No.	項目	M	SD
1	明るい 暗い	1.87	0.96
2	ふまじめ まじめ	1.85	0.97
3	うるさい 静かな	1.68	0.84
4	わがまま すなおな	2.15	0.94
5	のろまな すばやい	3.69	1.19
6	親切な いじわるな	3.82	1.11
7	あたたかい つめたい	3.60	1.02
8	よわむしな つよがりな	4.35	0.92
9	ようきな いんきな	2.54	1.24
10	人気のある 人気のない	2.81	1.17
11	責任感の強い 責任感の弱い	3.45	1.18
12	めだつ めだたない	2.05	1.14
13	活発な おとなしい	1.77	0.97
14	しつこい さっぱりした	2.26	1.03
15	短気な 気の長い	1.97	0.97
16	しっかりしている 甘えている	3.08	0.98
17	気が強い 気の弱い	1.84	1.10

Table 4 「いじめられっ子群」の性格特性についての平均値 (M) と標準偏差 (SD)

No.	項 目		M	SD
1	明るい	暗い	3.66	1.29
2	ふまじめ	まじめ	2.47	1.24
3	うるさい	静かな	3.37	1.51
4	わがまま	すなおな	2.74	1.20
5	のろまな	すばやい	1.92	1.10
6	親切な	いじわるな	2.95	0.93
7	あたたかい	つめたい	3.06	0.97
8	よわむしな	つよがりな	1.87	1.11
9	ようきな	いんきな	3.47	1.26
10	人気のある	人気のない	4.17	1.04
11	責任感の強い	責任感の弱い	3.82	1.15
12	めだつ	めだたない	3.82	1.35
13	活発な	おとなしい	3.81	1.23
14	しつこい	さっぱりした	2.80	1.14
15	短気な	気の長い	3.05	1.18
16	しっかりしている	甘えている	3.75	1.14
17	気が強い	気の弱い	4.12	1.14

Table 5 「いじめっ子群」と「いじめられっ子群」の性格特性についての *t* 検査

No.	項 目		<i>t</i>	<i>p</i>
1	明るい	暗い	4.456	**
2	ふまじめ	まじめ	1.587	
3	うるさい	静かな	3.914	**
4	わがまま	すなおな	1.563	
5	のろまな	すばやい	4.354	**
6	親切な	いじわるな	2.381	*
7	あたたかい	つめたい	1.541	
8	よわむしな	つよがりな	6.879	**
9	ようきな	いんきな	2.099	*
10	人気のある	人気のない	3.476	**
11	責任感の強い	責任感の弱い	0.906	
12	めだつ	めだたない	3.999	**
13	活発な	おとなしい	5.203	**
14	しつこい	さっぱりした	1.415	
15	短気な	気の長い	2.834	**
16	しっかりしている	甘えている	1.788	
17	気が強い	気の弱い	5.771	**

(注) **p* < .05, ***p* < .01

け、落ち着きがない。以上の「いじめっ子」のパーソナリティ特性は、一般に言われている「いじめっ子」のパーソナリティ特性に近いものと考えられる。

「いじめられっ子」の性格特性で顕著だった項目

は、「のろまな」「弱虫な」「人気のない」「責任感の弱い」「めだたない」「おとなしい」「気の弱い」であった。これらの点から、「いじめられっ子」のパーソナリティ特性は、内向的で、学級内でも消極的で目立たない存在であり、依存性が強く非常に神経質な面をもっていると考えられる。「いじめられっ子」についても「いじめっ子」同様、一般に言われている特徴が示されていると言えよう。

まとめと今後の課題

本研究では「いじめっ子」と「いじめられっ子」の特徴について、社会的地位とパーソナリティ特性の2側面から分析した。その結果、今日の「いじめ」の特徴が数多くみられた。

仲間集団内での社会的地位については、「いじめっ子」「いじめられっ子」とも普通の児童よりも社会的地位が低い傾向がみられた。特に、「いじめられっ子」の社会的地位は「いじめっ子」よりもかなり低く、集団内で孤立していることが見出された。

「いじめっ子」と「いじめられっ子」のパーソナリティ特性については、「いじめっ子」は外向的である反面、忍耐力や誠実さに欠けていることが明らかにされた。また、「いじめられっ子」は「いじめっ子」とは逆に内向的で、依存心が強く神経質であることが見出された。

今回の調査で明らかになった点の1つとして、女子の「いじめっ子」「いじめられっ子」があまり現われなかったことがあげられよう。「いじめ」は男子が中心となっていることは確かであろうが、女子同士による「いじめ」が存在しないわけではない。新聞記事などで、女子生徒からの「いじめ」の被害報告を散見する。しかし、今回の調査では、「いじめっ子」「いじめられっ子」とも1名に絞って選択させたため、女子については顕著なものも得られなかった。女子における同性の凝集性は高いことから、女子同士の「いじめ」を表面化させることは困難なのかもしれない。この点を考慮して、女子についての「いじめ」の構造を解明していくことが今後の課題の1つといえよう。

本研究は「いじめ」の1つの実態調査にすぎず、本研究で明確になったことはまだ「いじめ」の問題の氷山の一角にすぎない。本研究の成果をふまえ、「いじめ」の発生のメカニズムを明らかにし、有効な「いじめ」の予防策をたてることが今後に残された問題である。

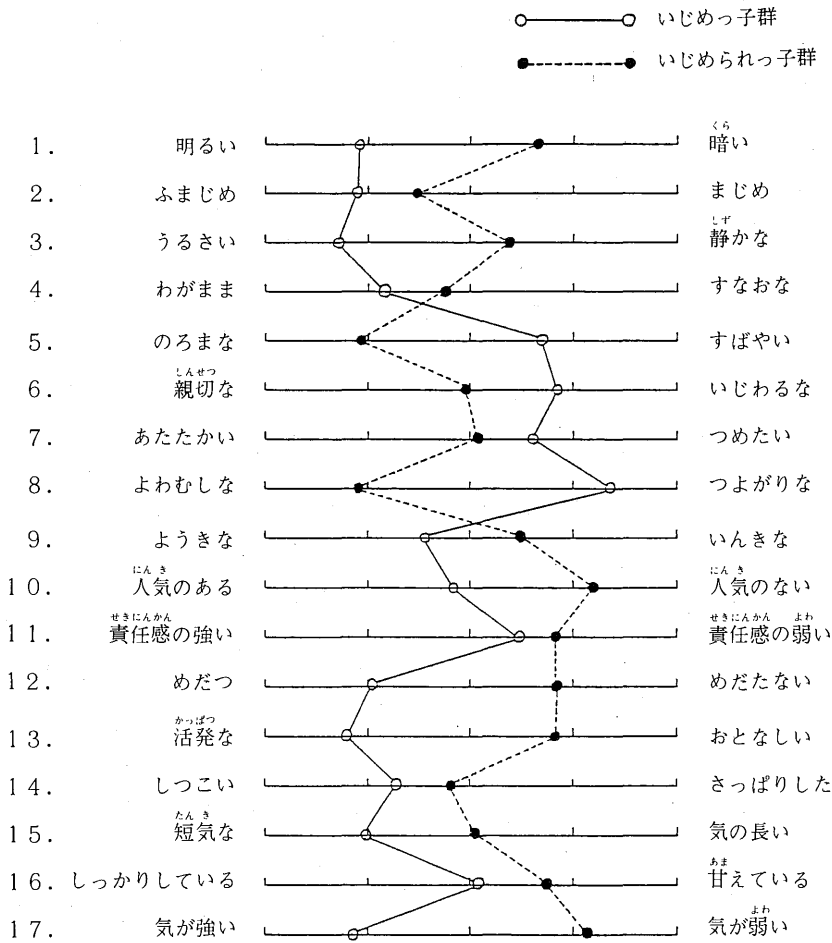


Fig. 7 「いじめっ子群」と「いじめられっ子群」のプロフィール

引用文献

深谷昌志・深谷和子 1976 遊びと勉強 中央公論社。
 深谷昌志 1978 現代っ子の生活 第一法規。
 加藤泰正 1981 いじめっ子の性格・行動特徴とその指導 教育心理, 29, 106-108。
 宮原広司 1983 いじめの構造と実践の課題 生活指導, 319, 5-8。
 文部省 1984 小学校生活指導資料3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題。
 桜井茂男・宮田敬 1985 いじめっ子・いじめられっ子 教育心理, 33, 942-947。

宗内敦 1981 いじめっ子にみられる仲間関係 教育心理, 29, 116-119。
 鈴木真理子 1974 児童用 Self-Differential Scale の作製 教育心理学研究, 22, 171-175。
 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房。
 富田武忠(編) 1980 いじめられっ子 講談社。

—1985. 9. 30受稿—